



211 A

衆議院議員  
福田久松

意見書

4426



114  
A 112

天正十一年四月



彼日清事件ハ國ヲ不ク我ク國威ヲ中外宣  
 揚シ南來我國ヲ正シテ自ラ彼レ改米列強ト其肩  
 ヲ併シ益々進テ其雄ヲ世界ニ競ハサシ一カ  
 ナル最モ愉快ナル境遇ニ達セシハ豈我國空前  
 ノ名譽ナラズヤハ其所謂戦後ニ経営ト唱  
 茲ヲ以テ上下勇躍政府ハ所謂戦後ニ経営ト唱  
 大ニ諸般ノ事業ヲ擴張シ人民モ亦國力膨脹  
 ヲ夢想視シテ之ニ雷同シテス已ニ自  
 ラモ其力能ハサル諸種ノ事業ヲ計思セリ然レ

今ヨリ之ヲ視シハ其舉マ總テ躍起ニ過キ隨テ  
事業悉ク粗大ニ失シ將來却テ蹉躓ヲ来シ大ニ  
困疲ヲ招クノ憂ナキヲ保セズ既ニ今日ニ於テ  
ルモ國家ハ豫算ノ費目既ニ成心ニ諸般ノ供給  
其踵ヲ継カス為メニ事業ヲシテ其計畫ノ如ク  
進捗セシムルヲ能ハス人民モ亦既ニ事業ニ着手  
シテ資本之ニ継カス為メニ其維持ニ困ルノ現  
象ヲ呈ス豈ニ戒心セサルヘケンヤ  
目下我國ノ人心ヲ觀察スルニ其上トナク下ト  
ナク悉ク皆痛ク將來ヲ憂苦シ甲乙相集マルハ

則チ曰ク戦後経営ノ成績如何ント丙丁相會ス  
レハ復タ曰ク今後経済界ノ大勢如何ントト社会  
ノ總テハ悉ク皆疑懼心ヲ以テ満クサレ強ニト  
五里霧中ニ彷徨セルモソ、如シ豈ニ可忌ノ兆  
ナラスヤ  
故ニ今ヤ政府ハ太ク其事業ノ酌量伸縮シテ大  
ニ刷新整備ノ期シ具進テ伸スヘキモノハ伸シ  
其退テ縮メ得ヘキモノハ之ヲ縮ムルノ方針ノ  
取リ自今大ニ國家経済ノ基礎ヲ固クシ以テ人  
心疑懼ノ念ヲ去リ以テ國民義奮ノ氣性ヲ喚起

セハハカラス然ラサレハ國家ノ憂害將ニ且  
夕ニ奈セントス而シテ目下我國政治上其刷新  
ヲ要スルモノ少ナカラスト雖凡就中其最モ急  
ナルモノ二三ヲ選ヒ電覽ニ供シ切ニ閣下等ノ  
採擇ヲ請ハントス

一 治水事業

本邦ノ地形素ト南北ニ長ク東西ニ狭シ故ニ其  
河流モ概テ二派ニ岐レ一ハ東南ニ他ハ西北ス  
特ニ其地質皆硬土ニシテ雨水地中ニ浸滯セズ  
之ヲ一日時ニ汎溢スルヲ常トス是レ本邦相水害

年ニ多ク人民其害ニ堪ヘサル所以ナリ  
我國從來治水ノ業講セサルニアラス之ヲ維新  
後ニ徴スルモ既ニ其資ヲ投スル實ニ一億二千  
万円余ナリ然レ其經歷ヲ考フレハ明治ニ  
十二年頃ニ至リ頓ニ其歩ヲ止メ以テ未ダ巡却歩  
復タ進マズ其増加スルモノハ殆リ臨時費ハ  
ナルノシテラズ水害年ニ益々多ク其慘狀愈々  
是レカラントス思フニ臨時費ノ増加ハ年々水  
害多ク為メニ復旧工事等ノ多キヲ証シ水害ノ  
多キハ經常費少ク為メニ治水事業完全ナラザ

ルヲエスモノナリ故ニ今ニシテ之カ善後策ヲ  
講セサレハ遂ニ國家ト人民トハ其負擔ト損害  
ニ堪ヘス用國爲メ沼地ト変スルニ至ルハシ  
而シテ其方法他ナシ大ニ今日ノ治水方針ヲ刷  
新シ河心ヲ改良シ水懷ヲ矯メ併セテ堤防ヲ増  
築スルノ三大方針ヲ実行スルニ如クモノナシ  
然レ此業ヤ容易ニラスシテ其資殆ント二億  
ヲ要シ地方ヲシテ其半ヲ負担セシモノニ國庫  
ノ負担猶ホ一億ヲラントス  
目下本邦ノ財政事情ヲ案スルニ驟ニ一億以上ノ

増支出ヲ許サス然レ治水事業モ亦茲再此終  
歲月ヲ空過スルヲ許サス故ニ奈何ニシテモ特  
ニ其財源ヲ求メ其急ヲ救フノ方法ヲ講セサル  
ハカラス而シテ之ヲ求ムルノ途他ナシ特ニ政  
府並督ノ許ニ立ツ一ノ鉄道公社ヲ起サシメ之  
ニ鉄道敷設法中ニアル豫定線ヲ敷設スルノ義  
務ヲ負ハシメ猶ホ之ニ加フルニ官設既成鉄道  
ヲ拂下ケ其代金ト彼ノ鉄道公債未募集額ト  
轉シテ治水費ニ充ツル一策アリノ如ク  
ハ本邦ノ治水事業優ニ其成功ヲ期ニ得ルノ

北海通ハ所謂本邦北門ノ鎖鑰其開拓ハ一其  
忽諾ニ付スヘカヨス故ニ政府ハ維新以來之ニ  
資ヲ投スル既ニ殆一億圓ノ巨額ニ至ラン  
トス而シテ其成跡如何ンヲ顧ミレハ寧ニ蹉  
多ク其賞讃又ヘキモ一強シトナシ特ニ日清  
事件以來人心驟ニ南ニ走リ復シ北ノ顧ミルニ  
違アラサレカ如シ然ルモ尚存茲此俟歲月ノ空  
過セハ他日大ニ嗟喟ノ悔アラシク故ニ今ヤ政府  
ハ該道ノ政治ヲ刷新シ大ニ人心ヲ鼓舞スルノ  
方法ヲ講セザルハカラス而シテ其方法ハ先ツ該

此ノ本國庫財政太ノ餘リヲス人民ノ資力  
寧ニ裕カシク今日鐵道事業ニ幾層ノ進歩ヲ見  
ルヲ得ン豈ニ一舉兩得ノ策ニアラズヤ但早  
見ヲシテ尚夫分ナラシメニハ更ニ進テ鐵道  
公債未募集額ヲ治水費ニ充テ他ノ拂下金ハ現  
今ノ鐵道ヲ廣軌ニ改築スルノ資ニ用ニルニ足  
リ國家若シ勇氣アツテ併セテ本業ヲ断行セハ  
將來我國ノ利益蓋シ甲者ニ幾倍徒スルモノナ  
ラン

北海通ノ政治  
水事業ヲ亦茲再此

通ヲ三四、畫シ之ニ縣制ヲ施クト今時ニ北海  
通廳ノ廢シ其縣ヲ一ニ代議士ヲ選出セ  
シメ競議勅治以テ其責ニ任セシムルニアリ斯  
ノ如クセハ人心斯ニ振ヒ輿論為メニ動キ北門  
ノ經營期年ナラズシテ成ラニ特ニ台湾ノ政度  
ニ比スルモ北門復ク斯ノ如クナラザルハカラ  
ス

三 台湾ノ政治

台湾既ニ我カ版圖ニ版レ之レニ制度ヲ施キシ  
以來之ヲ變更スル然則而シテ末外雷テ其適宜

ナルモノヲ見ス然ルニ其政治既ニ腐敗シテ復  
ク開クヲ忍ヒナレノ醜作ヲ暴露ス茲ノ以テ台  
湾批政ノ声日ニ益高ク時恰ニ策士ノ奇貨棄ス  
ヘキ所ナリ拓殖務省廢スルニ至リテ至  
リ豈ニ痛嘆ノ至リナラズヤ

然レ氏吾輩ヲ以テ之ヲ視レハ一ニ其要領ヲ得  
タルモノナキカ如シ台湾ノ政治之ヲ因循ニ整  
備スル能ハサル豈ニ拓殖務省ヲ凡ノ故ナラズニ  
又諒土ノ政治腐敗シタル豈ニ制度其物ノ罪ナ  
ラニヤ甲ハ統治日尚淺ク其制度未タ完備ナク

カス乙ハ事總ヲ草創ニ出テ吏員其人ヲ選々ニ  
違アラサカリシカ故ニシテ人々總テ創始ノ際ニ  
於テ多ク免カレ、能ハカニ數十リト又改ニ今  
日ニ於テ該土ノ制度ヲ其根底ヨリ改革スル  
又ルモノハ抑モ不可ナリ況ニヤ拓殖務省廢止  
論ニ於テオヤ要ハ只總督府ヲ廢シ文政ト軍政  
トヲ分高セシメ文政ハ拓殖務省ヲシテ之ヲ統  
ヘシメ軍政ノ事ハ陸軍及ニ海軍ヲシテ治メシ  
ルニナリ

今日該土政治ノ有様ヲ見レハ勤モ又ニ拓殖

務省總督府ヲ廢シ總督府復々拓殖務省ヲ設ケル  
トスル嫌ナキ乎又本省吏員ト民政局長吏員ト若クハ  
民政局長ト軍政局吏員互ニ相軋轉ノ兆ナキ乎是レ皆  
文政ト軍政ト相混交スル弊ヨリ来ルモノナリ  
今日該土ノ事情ニ於テ軍事的政治ニヨリ必要ナラン  
然レ民文事的政治ニ亦欠クヘカラス故ニ該土ノ政治ハ  
彼ノ北海通ノ現制ノ如ク軍事的政治ト文事的政治ト明  
亮ニ分高セシメ甲ハ直ニ陸軍及海軍ニ屬セシメ乙ハ合  
シク拓殖務省ニ隸セシムルモノトセハ庶幾ハ今日ノ弊  
ヲ矯メ得ルモノナラズ又該土ノ制度ヨラスニテ其弊ニ



就キ奸官汚吏随テ其跡ヲ晦カサシ  
勇断ナル明治政府ハ維新以來廢藩置縣ヲ断行シ四民ノ  
階級ヲ廢シ及ヒ國民皆兵ノ制ヲ施キシノミナラス明治  
廿三年ニ至リ更に進テ憲政ヲ断行シ我國ノ旧俗ハ之ヲ  
壞廢刷新ノ甚ク容易ナリシカ如シ然レニ拓殖事業ニ至  
リテハ從來失敗蹉跎特ニ多ク今ニ國民ヲシテ安心セ  
シメザルモノ甚ク多シ然ルニ今ヤ我國日清事件ノ結  
果更ニ一層其拓殖ニ手腕ヲ要スル台湾ヲ加フ豈ニ我  
カ拓殖政治重カラスヤ今輩ハ今ヨリ六七年前既ニ北  
海道置島主論ヲ主張セシテアリ是レ必竟北海道ノ

拓殖事業振ハサルノ感慨ニ基因ス今ヤ我國台湾ヲ得  
ルト共ニ新ニ一ノ拓殖務者ヲ置キ北海道ヲ併テ之ヲ  
統治セシム是レ素ヨリ必当ノ措置ナリトス然ルニ以  
来三四年ヲ越ヘサル今日ニ於テ輕早ニモ之ヲ廢スヘ  
ルト云フモノアルニ至ル豈ニ痛嘆ノ至ララスヤ若シ  
如斯セハ南北兩土ノ統治ハ如何ニスルカ北海道ハ復  
ヒ之ヲ内務省中ノ一局部ニ屬セシメ台湾モ亦如斯首  
尾振ハサルノ有様ニ終ラシメシメシトシテ豈ニ詢ニ兩土ノ拓  
殖進歩ヲ望ムノ真意ラシヤ故ニ曰リ拓殖務者廢ス  
ヘカラサルノミナラス諫者ハ我國右者中最モ其手腕

ヲ要スル一者ナリト然ルニ今ヤ斯ノ如キ盲誤ヲ聞ク  
豈ニ國家爲メ之ヲ排斥セズシテ止ムヘケニヤ  
右早見ヲ陳シ電覽ニ供ス尚詳細ノ如キハ他日面陳  
ノ期アルニ仰キ願フハ採擇アラシクテ敬白

明治三十年八月一日

衆議院議員 福田久 松

外務大臣 兼 農商務大臣 伯爵 大隈重信 敬

壁氏版印行

